総監督・伊庭貞剛　石多 エドワード

1947 年　（昭和 22）9 月 21 日、大阪市に生まれる。父はフィリピンで出生した日本人、母はスペイン系フィリピン人。
1965 年　大阪府立高津高校卒業。在学中、体操部部長、自治会会長。
1970 年　武蔵野音楽大学声楽科卒業。在学中、作曲を平井康三郎他に師事。
1976 年　「東京オペラ協会」の前身となる「グループ潮」第 1 回公演開催。以降、東京オペラ協会代表・芸術監督に就任し現在に至る。
1979 年～1999 年帝京大学にて、非常勤講師として「現代芸術論」「音楽」「教育実技」等を教える。
近年は東京オペラ協会の姉妹団体として生まれた、オペラプラザ長崎、オペラプラザ福岡、オペラプラザ愛媛、オペラプラザ岡山、オペラプラザ新宿などと連携してユニバーサルデザインによるオペラを全国展開中。また「国際交流はオペラで！」と考え、様々なオペラを諸外国の作曲家たちと合作し、共演を重ねながら友情を深めている。

指揮　クリストファー　マクマレン-レアド

2011 年ミュンヘン　インターナショナル　オーケストラの指揮者。アメリカのルイジアナ州ニューオールリンズに生まれ、トリエール、バーゼル、そしてミシガン州のミシガン州アンナーバーで育った。続いてダルトモス大学に入り、音楽特別上級会員という高い名誉を受けて卒業した。その後彼はワイマールのフランツリスト音楽学校でグンター・カーラート教授の元で芸術家認証プログラムを終了した。
近年クリストファーは、ラインスベルク音楽大学、ベルリン　ファンタジー　オペラ、ケープ　コド　オペラ、プロヴィデンス　オペラ、を指揮し、チュービンゲン、ミュンヘン、ベルリンでコンサートの指揮もしている。またモーア劇場でのシーカット　エラートの世界初演、カール　ジェンキンスのスタバート　マーテルのベルリン初演、柴田南雄作曲「忘れられた少年」ドイツ初演、の指揮を特認された。これからの注目される活動は、シモーネ　コルティの新作初演をミュンヘンインターナショナルオーケストラと、そしてガーシュインの「青い月曜日」をババリアン国立オペラで指揮することである。

主なキャスト

♦ 広瀬宰平
蔵田 雅之

♦ 梅子
石多 加代子

♦ 塩野門之助
枝川 一也

♦ 旅人
奥村 泰憲

♦ 森の精
澤田 理絵

♦ 松
名越 桃子

その他出演者　田鶴子：鈴木のぞみ　峩山和尚：鈴木一志　小川治兵衛：幸神人　切り上がり長兵衛：結城孝一　隆子：田村多佳子
心の精：谷野有紀　北野有希依
東京オペラ協会管弦楽団　篠笛・尺八：竹井誠　三味線：杵家七三
オペラプラザ新宿　全国オペラプラザグループ有志　エドワードキッズ　他
その他　照明：株式会社舞台綜合サービス　映像：michi＆井上奈保美　ヘアメイク：佐藤てい子　舞台監督：遊達人

別子銅山に咲く花々が舞台に登場

アカモノ

マイヅルソウ

ウスユキソウ

アケボノツツジ

タカネイバラ

合唱・オーケストラ追加募集中！

■プロローグ

別子山に秘めやかに咲く花と深い緑の木々が優しい歌を歌っている。そこに旅人がやって来て、活気付いていた往時の別子山を蘇えらせる。

■第一幕・・・弘化 4 年～明治 27 年（1847 年～1894 年）

別子山で働く女たちが、庶民的に、日本のいい男ってどんな人？と問いかけながら物語は進む。別子山の昔からの生活の様子、切り上がり長兵衛による銅山の発見、広瀬宰平の指導力による繁栄、それらが次々と展開して行く。
一方伊庭貞剛は 22 歳で尊敬する勤皇の志士、西川吉輔の要請で動乱の京都へと旅立つ。明治維新以後は官吏の世界で、働く事となる。そして松と結婚するが、北海道での勤めに付いて行った松は、無理がたたり、はる子を残し、早世してしまう。やがて後添えに梅子をもらい、伊庭は仕事へと邁進して行く。しかし天下・国家を考えて行動してきた正義感溢れる伊庭にとって、堕落した藩閥政治の官界はもはや自分が住むべき世界でないと考え、きっぱりと止めてしまう。そして故郷に帰り家族との束の間の団らんを楽しむ。
その頃、住友の発展のため優秀な人材を探していた広瀬は、伊庭を住友に本店支配人として誘う。伊庭は住友に勤めながら、日本初の衆院選で当選するも、政治の世界にも失望して、やはり止めてしまう。そして、煙害で大変な状況にある別子銅山に、単身向かうことを決意する。

■第二幕・・・明治 27 年～大正 15 年（1894 年～1926 年）

火中の栗を拾うが如く、荒れ果てた別子山に来た伊庭貞剛。自然が徹底的に破壊された別子山の嘆きの声を深く抱きとめながら、過酷な労働に苛立つ鉱夫たちとの危険な折衝にも、誠実に粘り強く向き合い、解決に導く。煙害を無くす為に、四阪島に製錬所を移転する決定を下し、山を緑に戻すため、年間 100 万本の植林をするなど、次々と実行してゆき 5 年後、ほぼ解決を見、大阪に帰って行く。
労使紛争の解決、煙害の克服、別子山の緑化、など全てを熟慮、祈念、放下、断行し、ついに解決に導けたことを、帰阪して誇らしげに報告する伊庭に、信頼する峩山和尚の「世の中まじめに観てな。」の一声。やがて、自分の成功は、難しい事務作業に一生を捧げてくれている部下、別子銅山で働いた多くの鉱夫やその家族、そして大自然からの恩恵があって初めて出来たことなのだと気づき、峩山和尚に改めて感謝する伊庭。
別子山を緑に戻せたことを謙虚に感謝する伊庭に「晩晴」を見出す。日本人の本来の心、清貧、陰徳、謙虚、素朴、無為自然、自然賛美、などにこそ世界へのメッセージがあると、死を前にした伊庭が静かに語る。

■エピローグ

別子山がもう一度静かに大きく浮かび上がる。自然こそが神だ、と旅人は語り、微笑みながら去ってゆく。最後には、別子山に生きるすべての命がもう一度元気に甦り、大自然に抱かれることの幸せが大合唱で歌いあげられて幕となる。